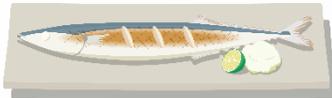


全長に回りたる火の秋刀魚かな
鷹羽狩行

秋の彼岸が過ぎて、暑さもようやく落ちつき、朝晩は涼しさを感じるようになりました。次第に日も短くなり、秋が深まりつつあります。秋の味覚を代表するものと言えば、秋刀魚（さんま）です。先日、久しぶりに我が家の食卓に秋刀魚の塩焼きが並びました。しかし、その秋刀魚は私の期待に反して、小ぶりの魚体を皿に横たえていました。銀色に光り脂がのった大きな秋刀魚はどこに消えてしまったか。ここ数年、不漁が続き価格も高騰していることは知っていましたが、これほどとは思いませんでした。今は高級魚(?)になってしまった秋刀魚。大根おろしを添えて醤油を落とし、愛おしくように食べました。



おすすめ書籍



阿川尚之著『憲法で読むアメリカ史 (上下)』
(PHP新書)

米国のトランプ大統領が、亡くなった連邦最高裁のリベラル派判事の後任に、連邦控訴裁の保守派の判事を指名したというニュースを聞いて、自宅の書棚から取り出したのが本書です。米国では国論を二分するような政治問題が起きた時、連邦最高裁が憲法解釈を通じて、国政を方向付け問題の解決を図ってきました。本書は、米国の民主主義を形作ってきた憲法や判例から、建国以来の歴史を物語として辿ることができる内容です。これまで知ることのなかった米国の歴史や社会の実像が描かれており、米国の現在や今後を理解する上でも、さまざまな示唆を与えてくれる著書です。

輝け若駒！ 僕らが描く新たな青春～生徒達が輝いた体育祭～

9月8日・9日の2日にわたり体育祭が行われました。今年度は3年に1度の「馬陵祭」の年でしたが、新型コロナウイルス感染拡大にともない、体育祭に変更となりました。「輝け若駒！～僕らが描く新たな青春」をテーマに、全校生を4つに分け、学年横断の連合チームを結成し、チームの対抗戦により得点を競う形式で行われました。1日目は書道部のパフォーマンスで幕を開けました。開会式・準備運動の後、玉入れと綱引きが行われましたが、気温が上昇し35度近くに達したため、午前中で競技を切り上げました。2日目は残りの種目を精選し、ミッションレース、部局対抗リレー、障害物競走、有志ステージ発表、連合対抗リレーに絞って行われました。生徒達は思い思いのクラスTシャツを身にまとい、それぞれの競技に汗を流し、自分のチームを応援し、有志による歌やダンスを楽しみました。大会はBチームの優勝で幕を閉じましたが、「学年間の壁を越えて、親睦を深め、団結力を高める」という所期の目的は、見事に達成されました。また生徒諸君は、熱中症が心配される気象条件のもと安全を第一に考え、中断と予定変更を受け入れ、臨機応変に対応してくれました。体育祭を通じて、生徒諸君はさまざまなことを経験し、また一つ成長してくれました。



旧制相馬中学の運動会は地域あげての一大イベントだった

明治から大正にかけて、旧制相馬中学の運動会は、単なる学校行事ではなく、中村町を中心とした地域住民が楽しみにしていた一大イベントでもありました。『相中相高八十年』は、当時の運動会について詳細に記しています。

学校が創立された明治31年当時は小規模な運動会でしたが、明治34年には創立三周年を記念して大規模な運動会が開催されました。明治34年5月8日付け「福島民報」によれば、校門にはアーチが建てられ、会場正面に「創立記念碑」と大書された白布が飾られ、至る所に万国旗が掲げられました。参加者は生徒だけではなく、来賓の中村高等尋常小学校、八幡尋常小学校の職員生徒も加わりました。参観者は一万人に及び、来賓には判事、検事、各町村長、町会議員など地域社会の名士が名を連ねました。

此日参観人無慮一万人の多きに及び、実に近来無比の大盛会にてありしが、参観人の重なる人々は、部長、判事、検事、林区署長、警部、各高等小学校、各町村長、町会議員、其他知名の紳士等百余名にして、来賓には茶菓及昼餐を饗応せり。当日の経費総計は二百余円にして、職員より金式拾円、其他悉皆寄附金より成れるものなりと。

また、運動会の運営はすべて生徒によって行われましたが、経費の総額二百円余りは、職員や参観者の寄付で賄われました。

卒業生の回想にも、「中村町行事の中で一番人があった。そのうえ日露戦争の勝利の後だったので会場の二の丸競技場には、黒山の人だった」(相中第12回卒高橋甚四郎)、「相中の運動会は相馬中村町の大人気の催しのひとつでありました。なかでも相馬郡内一六校(上真野村から北の小学校)対抗リレーに人気がありました。二の丸グラウンドが満員で身動きもできないほどでした。」(相中第29回卒青田農夫雄)とあり、地域あげての行事であったことがわかります。『校友会雑誌』によれば、大正に入ると運動会は「生徒の知育、徳育、及び体育の三者の試験場」であり、「自己の力量が級友の如何なる地位にあるかがわかる」ものとする認識が示され、「協同一致」「勤労」「公明正大」「敏捷快活」がスローガンとなりました。また、多い時で70種目を超える競技が行われた年もありました。運動会は生徒の意識の高揚と校風の振興を図るとともに、生徒の活動を地元住民に示す絶好の場でもありました。ふだん見ることができない教員の姿に抱腹絶倒し、地元小学生の遊戯や相撲土俵入り、相中名物仮装行列が人気を博しました。まさしく地域あげての祭りであったといえるでしょう。



魚売り競争の写真

キックオフセミナーが行われました

9月10日、イノベーション・コースト構想を担う人材育成事業の一環として、1年生を対象にキックオフセミナーが行われました。6月に予定していましたが、コロナ禍により遅れて実施となりました。当日は福島県イノベーション・コースト構想推進機構専務理事の伊藤泰夫氏をお招きし、「福島イノベーション・コースト構想が目指すところ」をテーマにご講演をいただきました。生徒諸君は、震災後の福島県の現状について認識を深めるとともに、イノベ構想の目的や事業の概要について、メモを取りながら真剣に耳を傾けていまし

た。1年生にとっては、これから2年間にわたって取り組む教育プログラムのスタートにあたります。生徒諸君が相双地区の現状を理解し、さまざまな問題に関心を持つこと、探究的な学びを通して、生徒一人一人が、問題解決に向けて考察を深めること、主体性と粘り強さ、協働する力と創造力を身につけることを期待しています。



2学年分野別進路ガイダンスが行われました

9月15日、進路意識と学習意欲を高める目的で、2学年分野別進路ガイダンスが行われました。生徒は希望する学部・学科・分野に分かれ、大学や専門学校からお招きした講師の先生方から授業を受けました。出前授業は多岐にわたりました。主なものは以下のとおりです。生徒諸君には自分の進路を深く考えるよい機会にして欲しいと思います。

- 【外国語】東北学院大学 植松靖夫先生
「英文を書くための5つのルール」
- 【心理学】尚綱学院大学 三好敏之先生
「こころとからだのつながり」
- 【食物栄養】東北生活文化大学 伊藤常久先生
「健康作りについて～食・栄養の専門職が果たす役割」
- 【体育学】仙台大学 片岡悠妃先生
「コーチングとティーチング」



- 【教育学】山形大学 今村哲史先生(オンライン)
「意思決定能力の向上を図る手立て」
- 【経済学】東北学院大学 伊鹿倉正司先生
「私たちに幸せにする新しいお金の話」
- 【音楽】宮城学院大学 太田峰夫先生
「音楽科を目指すための情報を知ろう」
- 【工学】東北工業大学 佐藤篤先生
「情報を運んでくれる光レーザー」
- 【看護】医療創生大学 稲毛映子先生
「保健師の仕事とは」
- 【理学】山形大学 奥間智弘先生(オンライン)
「運分数の話」
- 【公務員】東京IT会計専門学校 井上純先生
「公務員になる為には？」



中間考査が始まりました

今日から2学期の中間考査が始まりました。生徒諸君にとって日々の学習の理解度や学習内容の定着度を測る大切な考査です。成績の評価にもつながりますので、生徒諸君には体調を整え、全力で取り組んで欲しいと思います。

修学旅行保護者説明会

9月2日、2学年の保護者を対象に修学旅行説明会を行いました。コロナ禍により予定していた関西方面から岩手・山形方面へ行き先を変更する案について説明しました。今後は感染状況を踏まえながら、安全第一に対応していきたいと思ひます。

同窓生列伝⑰折笠晴秀 (1885-1965) 続編 ～相馬郷友会を語る座談会について～

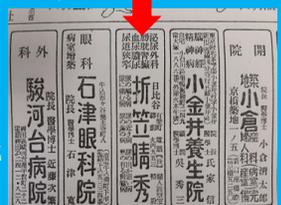
昭和11年に相馬郷友会が発行した「相馬郷」30号には、郷友会を語る座談会について特集が組まれています。出席者は相馬家当主の相馬恵胤氏と、在京相馬出身者で名を成し功を遂げた方々です。その中には折笠も名を連ねています。すでに医師として地位を確立し、翌年には「結核菌の腎臓通過に関する実験的研究」をテーマに博士論文を提出し、医学博士の学位を得ています。参考に相馬家の家令を除く出席者の氏名を以下に示します。

相馬恵胤氏、松本重威氏(元興銀副総裁)、草野俊助氏(東大名誉教授農学博士)、船田三郎氏(慶応大学教授)、森五六氏(予備陸軍少将日本生命理事)、阿部喜藤治氏(弁護士)、渡辺扶氏(京浜コークス株式会社社長)、折笠晴秀氏(医師)、成田儀六氏(川崎第百銀行丸の内支店長)、立野儀光氏(日満鉛鉄株式会社取締役)、遠藤新氏(建築家)、伏見猛彌氏(日本国民精神文化研究員)、浦島実氏(弁護士)、吉田秀夫氏(産業組合中央会)

錚々たるメンバーですが、下線を付した方々が相馬中学の卒業生です。この座談会は、この年の2月に亡くなった先代当主孟胤氏の後を継ぎ、相馬家32代当主となった恵胤氏が招集したもので、会長として郷友会の衰微の兆候を踏まえ、会員の融和と親睦を鞏固にするために開かれました。どうしたら状況を打開できるのか、参加者がそれぞれの立場で忌憚のない意見を交換しています。会員の減少、会費のあり方、機関誌の発

刊等、話題は多岐にわたりました。前半、折笠の発言はほとんどありませんが、後半、積極的な発言がみられます。機関誌の内容について検討がなされた際、「衰微して来たのは、度々会はないから親しみが薄くなって来たせいだ。親しみがあつて、初めて、機関誌が欲しい様になる」と述べ、郷友会の充実と機関誌の発刊が不可分の関係にあることを指摘しています。恵胤氏と若い相馬出身者を結びつける配慮にも触れ、「学生連中は出る機会がないから、適当な機会にお邸で極く簡単な、会費が多いと何うしても第二世を引連れて来られないから、安い会費で、恵胤様にお目にかかる機会を作つて頂くのは如何でせう」と述べています。また、「恵胤様を圍んで、吾々何も出来ませぬが、心持だけは出来る丈の事をやる積りで行かなければならないと思う」「吾々が十人でも、二十人でも恵胤様を圍んで、本当に親しい固い結束が出来る事が第一の様に考えます」と発言し、相馬出身者が旧藩主を中心に結束することの重要性を述べています。それは「精神的の連結はもつともつと密接にして行く」という恵胤氏の意を汲んだ発言でもありました。

以上のことから、折笠は相手の話をじっくり聴いた上で、議論を建設的な方向へまとめていく存在であったようです。また、旧藩主である相馬家が相馬出身者結束の紐帯であるという認識を示している点も注目されます。



昭和4年6月19日付け東京朝日新聞の広告欄